

―ただひとりの存在ひとのために

生きてゆくことの愛

三宅艶子

大和書房

—ただひとりの存在ひとのために

生きてゆくことの愛

三宅艶子

生きてゆくことの愛
—ただひとりの存在のために—
銀河選書 (75)

一九六九年 二月二〇日 初版発行

定価 三四〇円

著 者 三 宅 艶 子

発 行 者 大 和 岩 雄

発 行 所 大 和 書 房

東京都文京区関口一〇三三

振替東京六四二二七

電話(〇三)四五一一四

郵便番号・一一二

製版・印刷・日放印刷 製本・長生堂

落丁本、乱丁本はお取替え致します

<検印を略す>

© 1969

変らない永遠の愛

——湧き出す内奥の知性——

「愛」とはどういうものか。「愛する」とはどういうことか。私にはそのほんとうの姿がわからないのです。

愛について、たくさんの本がありますけれど、これこそが真の愛だといいきれるものはないでしょう。愛とは学ぶものではなく、自分の心に湧き出してはじめて存在する、姿かたちのないものだからでしょう。

十六歳のときにこれこそが愛情だと感じたことも、三十歳のときには違ったうけとり方になります。そしてもっと時がたつて考えれば、これもまた変ってきます。それでいて、いくつになっても変らないもの、いつの時代、どこ土地にあっても変らない、そういうものとして愛は私たちの心の中にあると思われれます。

私はこの本の中で「愛」についての講義をしているわけではありません。お説教でもありません。

あなたと一緒に、「愛」「愛する」ことに關して、いろいろの角度から考えて見ようと思ったのです。

「いかに生きるか」「いかに愛するか」は How to の書物で学べるものではないでしょう。でも身のまわりの小さなことがらの中に、それを学ぶ素材はたくさんあるのです。私はここに、それをいくつか並べて、考えることへの一つのお手伝いになればとねがっています。

私たちはみんな、本気で生きて行きたい。冗談に生きている人はないはずですけど、ときどきなにかに押し流されて、ぼんやりしてしまうことがありますね。この本のお喋りの中から、あなたが自分自身を見つげ出す鍵を探し出して下されば幸いです。

著 者

生きてゆくことの愛／目次

愛し愛されるもの

11

——男と女の絆

本当の愛を考える

12

——三つの実例より

欲望と虚栄の錯覚

愛とは教えるものか

相手を救うというエゴイズム
好かれることより大切なこと

愛し愛される愛とは

欠くべからざること

20

——いかに愛するか

女だけの欲びとは？

第二の人生の始まり

女らしさの意味



悲劇のタイプ(1)——男まさりの女性

悲劇のタイプ(2)——腰かけ女性

いかに愛するかを知ること

十恋が訪れるとき 30

それは縁ものか

探し求めるもの

愛を育てるもの 35

——ただひとりの存在のために

深め思いやる愛 36

——二人のための知恵

自分にとってただひとりの人

思いやる心から生まれるもの

無理をすることの愚

何気ない交わり

あたたかく見つめる愛 43

——心を結ぶ知恵

相手を見つめる知恵
情にほだされる危険
芽生える愛が枯れるとき

信じあうことの愛 51

——考えるときの知恵

不信に悩む女の告白
美德が悪になるとき
すべてを否定する考え方
信頼の逆作用——不信ノイローゼ

つらぬきとおす愛 58

——勇気をなくすときの知恵

貧しい男と豊かな女
愛の勇気とは何か？
自分を大切にすることの意味



↑愛の技術——交際のTPO 65

若い日の微妙な知恵
デイトの二つの型

女が男に惹かれるとき
どんなテクニクに弱いのか
通じ合う二人の気持
お金では築けないもの

愛を深めるもの 79

——欲びの発掘

“許す”ということの愛 80
——不信のときの知恵

味わい深い考え方
愛が始まるとき
欲望と願望の見わけ方
おおらかであるということ

“憎む”ということの愛 87

——自分を知るときの知恵

複雑な人間特有の感情

嫌い憎む心理の裏に……

恋し合う一つの出来事

愛の変型なのか

“耐える”ということの愛 96

——辛いときの知恵

女に一番欠けること

際限のない行為なのか

心を充たすもの

“別れる”ということの愛 103

——失意のときの知恵

甘く淡い想い出

生まれて避けられないドラマ

好きだから別れるのか？

恋の虜にする武器



“断つ”ということの愛 112

——ささげつくすときの知恵

身を犠牲にする切実な願い

ひとときも離れたくない……

好きなのに断つ勇気

もう一つの愛の発見

↑異性を惹きつける秘訣 120

——どうすればできるか

むずかしい判断

永続させる方法

この愛をささえるために 125

——女としての切実な心得

同棲という危険な愛 126

——悲劇を避けるときの知恵

どうしようもない問題か

ずるずるべつたりの原因

この悲しみに耐えられるか
ものの裏側を見る方法

からみもつれる愛

—— 混迷を生きたときの知恵

134

しのびよる心と体の誘惑……

自分が招いた悲劇

〃新鮮な魅力〃という罠

やりきれない女の本能

解決は不可能なのか

あこがれ美化する愛

—— 傷つくときの知恵

145

今もつとも多いケース

魅せられた優雅な世界——恋人との断絶

妾と愛人は違うのか

支払わねばならなかった愛の代償

受ける傷と与える傷



かりそめ溺れる愛

—— 厳しさを知る知恵

155

恋愛遊戯の罠

性を道具視する女

肉体で知った愛

男だけを責められるか？

女だけの知る歓喜と苦痛

165

—— 背負わされた業について

捨てられ汚された愛

—— くじけるときの知恵

166

女であるがゆえの業とは？

ある夏の出来事

見知らぬ青年との出会い

ふみにじられた心と体

忘れることができるのか

立ちなおるための傷

女だけの受ける仕打ち

経験する苦痛と喜び

知るべき哀しい深情

さめた愛になぜ執着するのか

相手を理解することから始まるもの

わかりすぎていやがられる例

〃報い〃を期待してよいのか

乳房にひそむ愛の源泉

人の心を奪うもの

——魅力のある女とは

恋する娘のために(1)

——幸福のあり方

二人でなければできないこと

美しく楽しくする工夫

194

193



恋する娘のために(2)

——デイトの仕方

恋愛感情を高めるもの

女の陥ちやすい虚栄

本当の心づかいとは

愛を交流させる小道具

働く娘のために(1)

——自分の生かし方

結婚と仕事の心得

なぜ問題は起きるのか

働くことより大変なこと

自分でつくり出すもの

働く娘のために(2)

——壁を破る方法

女子だけの興奮

最初にぶつかる壁

不満をくすぶらせる前に

212

205

198

どんな存在になればよいか

結婚する娘のために

——ある愛の出発

219

スイートホームをつくるとき

魂の中にあるもの

こめられる祈りと歴史

女を生きる大切な心得

——心をとらえる魅力と条件

224

女らしくなるといふこと

忘れられない魅力と条件

欠点を生かす知恵

//この人のためにしてあげたい……//

しとやかさといふこと

好意が女を美しくする……

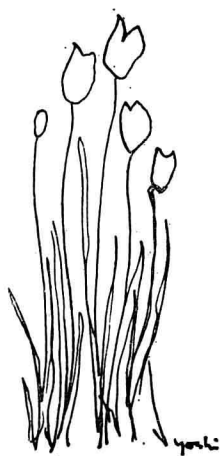
充たされた女の吸引力



カバ―写真 白旗史朗
中扉・本文カット 保坂佳子

愛し愛されるもの

— 男と女の絆



本当の愛を考える ――三つの実例より

欲望と虚栄の錯覚

愛することとはどういうことだろうか。そして愛されることとは。

ひとはそれぞれ性質が違って、いつも愛することが好きな人、愛されることが好きな人とある。そして、いろんなたちもあるけれど、大ざっぱにわけると、今までは男の人の方が「愛する」型で、女性が「愛され」型の傾向があった。

しかし男、女、という頒け方^{おとけ}はあるいは間違っているかも知れない。私があるとき昔の女は愛されることを待っていた、といったところ、宇野千代さん（作家）に「それは思い違いよ。歌舞伎の芝居に出てくる女を見てごらんさい。みんなものすごいほど積極的に女の方から愛してますよ」といわれたことがある。そういえばたしかにそうだが、一方愛されることだけをだまって待

つ女が多かったために、かえって情熱をすすんで燃やした女が芝居や踊りの主人公として残ったのかも知れない。宇野さんの言にしたがって、「男は」とか「女は」という区別はやめるにしても、たしかに愛し型と、愛され型の二通りある。

どっちが幸福だろう。愛することの好きなたちの人は、いつも自分から相手に積極的になる。愛する対象を、自分の思う型にまでつくりあげたいと思う人もある。愛されることを待つたちの人は誰かが自分を愛し始めるまでは、心を動かさない。そして愛されたと感じると、はじめてそれを選び、受けいれる。そのような段どりは、もろもろの恋愛の径路けいろによくある。が、考えて見れば、これはほんとうは「愛」などという言葉をつかう筋合いではなく、単なる男女のつきあいのすすみ方のスタイルにすぎない。

男女間のつきあいは、自分では「大恋愛」と思い、激しい情熱を感じることも、立場をかえて眺めれば欲望のさせる業であったり、虚栄心からくることであったり、ときには利害の打算でさえある場合がある。愛するにしろ、愛されるにしろ、それはしばしばエゴイステイックな心のあらわれを間違えているものである。

愛とは教えるものか

ある男の人で（仮りにAと呼んでおこう）、自分は愛情が深いと信じ、いつもひとにもそれを

いつている人があった。Aは恋をするときにいつも自分が救世主であるかのように錯覚する。最初、体の保養にしばらく滞在していた漁村で、一人の少女を愛し始めた。頬の赤い、可憐な娘さんであった。Aは、その少女が田舎にくちはてるには勿体ないほどの美貌と頭脳を持っていると思ひ、なんとかして都会に連れて行きたいとねがった。彼はまだその頃親がかりの身で、よその娘を学校にいれて、面倒を見たりできる立場ではない。それでもAの情熱は、彼の両親を説きふせ、そして少女の親をも説得した。自分の婚約者として、ふさわしい教育をするということになったのだ。Aはおとなしいその少女に語学を教え、本を読ませ、とうとう東京に連れて行つた。そして一人前になるまで親類の家に預けることにした。Aのいう一人前とは、彼の周囲の家庭のお嬢さんたちと同じような教養をつみ、同じような言葉づかいができるまでということらしかった。

少女より六つ年上のAは、まるで父親か兄のように彼女を自分の好みの女性に仕立てることに熱中した。それに必要な経済的な負担を、Aの親たちが負っていたのは、よくよく息子を盲愛していたのだろう。少女は田舎にいた時は素朴な表現で、Aを愛していたが、都会に出て馴れない修業をさせられると、だんだん顔色も冴えず、元気がなくなってきた。そんなことで無理やりはいらされた学校で勉強ができるはずもない。少女ははじめのうちAのいう通りに、Aにふさわしい妻になることを幸福と思っていたようだが、神経衰弱になつて田舎に帰つてしまった。結婚も、